言語相互行為理論から見る文化比較

Kulturvergleich aus der Sicht einer Theorie von verbaler Interaktion
comparative culture study based on a theory of verbal interaction

丸　井　一　郎

1．理論的実践的認識関心[1)]

筆者は丸井（1998）「異文化間相互行為理論の基礎：文化とコミュニケーション」においていわゆる文化とコミュニケーションの関連を論じるために言語相互行為の理論（相互行為の社会言語学）による基礎づけを試みた。1999年及び2000年度高知大学教育改善推進費（学長裁量経費）の助成を受けた研究プロジェクトの成果として、丸井他(2000)「異文化性と教授方策：非言語表現を素材に」と丸井（2001a）「非言語表現の意味作用：異文化適応教育の構成要因として」では非言語表現に関して、同(2001)「異文化適応教育の諸前提」においては異文化性の定義とその習俗的イメージの調査を基にして異文化適応教育の構想に関わる理論的な諸問題を論じた。さらに同プロジェクトの一環として、教育目的のシンポジウム「異文化適応と言語教育」及びその報告書（2001）では異言語習得と異文化適応に関連する理論的実践的な諸問題を取り扱った。

本論考では上記研究を引き継ぎ、言語相互行為事象を中心として文化比較の理論的枠組みを構想することを課題とする。より遠い理論的な目標は異文化間言語相互行為の理論を精密化するために文化比較がどのように活用できるかを考察することにある。実践的には専門教育における教育内容と教授方策の開発に対して適用できるよう、「異文化理解」、「異文化適応」、「異言語教育」などの概念を精製する一助となることを目指す。

ここで考えられている言語相互行為事象の文化間比較研究の方法は、主として質的解釈的方法であり、電子化された文献学とも言える。吟味される対象事象は実体的また表象的対象一般であり、とりわけ文化記号（表象記号、イメージ）及びその意味作用の母体である相互行為の実現・媒介過程である。

以下では上記諸論文における様々な論考・定義・定式を利用しながら論述する。その際出典の指示のため上で各論文名に付された略号を用いる。これには「報告書(2001)」を含む。また他の参考文献や資料も同様の方式で略記する。なお本論考でも論旨に比較的密接に関わる注釈や文献指示はできるだけ本文テクストの流れに取り込む方式を採用した。

2．認識関心に適合する「文化」概念の定義

定義はそれ自体言語行為であり、目的によって様々な形式をとりうる。ここでの定義の目的は、言語相互行為における異文化間の差異（異文化性）を理論的に解明・理解し、そのことを通じて説明し、教え、学びうるものにすることにある。丸井（1998, 127-）ではこの目的に添う定義について論じたが、それは以下のように補完される。主たる定義に加えて副を添えたのは上記目的関連に沿うものである。つまり行為に外在するのではなく、行為内で行為と共に出現するという視点を強調するものである。

定　義（主）

文化は特定の関係性の中に生きる人々を越えたものではなく、人々の了解行為の中に位置づけられる。我々にとって、自己が、他者が、環境・世界がそのように見え、そのように経験されること、かつそれを仲間と共有すると信じていることの中にある。

定　義（副）

文化は相互行為事象、つまり共存在と相互の働きかけ合いの中で働き、それを制御し、また逆に相互行為を通じて間主体的に了解可能な事象として実現される。

上のような文化の定義によって相互行為事象とその異文化性を解明するには、さらに幾つかの前提が明らかにされる必要がある。それは以下の3点である。まず静的あるいは動的構造だけではなく、短期及び長期の発生・生成・形成の過程を重視すること、つまり論理的再構成と発生的認識のバランスを追求すること。次に視点設定の基本は方法的個体主義ではなく間主体主義・共主体主義にあること。最後に了解行為の核心は恣意性の程度を問わず記号形成体と記号化する能力にあることを評価すること。具体的な探求のプランとしてはこれら3点を逆の順にたどって、記号（文化記号）の意味作用を十全に評価するが、その解明を認知内容・認知機構に留めず、間主体的な了解行為の中での機能態として捉え、さらにその了解内容と了解行為の示す間主体性の外延を観察可能な社会の諸分野とその歴史性にまで及ぼすことを目指す。

具体的に例示しよう。いわゆる相槌の表現である「うん」という日本語の音声表現（記号！）を、談話組織の継起的実現というコンテクストから孤立させて、話者の同意や聴取確認の表現として捉えるだけでなく、両参加者が実現する同時性、共同性に関わる機能態として捉える。そうすると「うん」を単独で見るのではなく、これを含む「ーね」→「うん」→「ふん」といった発話連鎖（「三歩形式」）全体が話題処理の小局面完成における共同実現の形式として理解される。この三歩形式の同定もそのようなものとして完結するのではなく、それと適合的な相互行為（談話）の実現手順及び相互行為類型の認定、さらには例えば現代日本の特定社会領域と参加者間の関係に関連づけられる必要がある。つまり孤立した認知主体（実質上は論理的な認知機構のモデルとその部分

モジュール）間の情報のやり取りではなく、間主体的社会的事実形成レベルへの関連づけが要請され、また確認される。

3．関連領域の区分

文化概念の操作的な定義は、概念の内包に対応する外延とそのクラスを素描することで完結する。上述の先行研究（特に丸井2001）で述べたように、これは文化の差異つまり異文化性が体験され観察される領域のことでもある。以下では先行の諸論に従って要点のみを述べる。設定された課題に適合する分節の目印は、まず第一に（言語）相互行為という出来事の中か外かということにある。一単位の相互行為事象の前後で変化しない行為外の要因・領域と行為の構成自体に関わる行為内の要因・領域とが分岐する。各領域はさらに行為者の認知内容（端的にはイメージ）にかかわる「ソフト」な事象と、行為者を離れても存する機構的制度や行為場面、場面内の物体など「ハード」な事象に分節される。行為内のソフトな要因の典型は様々な記号表現であり、これらはさらに言語のように恣意性と非連続性で特徴づけられる「ディジタル」な要因と身振りのような「アナログ」な要因に区分される（図１）。この区分は、行為それ自体の構成の視点から見たのではないという意味で、きわめて外形的なものである。その意義は異文化性が体験・観察される領域を概観し、体験事象を定位する最初の手がかりを与えることにある。異文化適応の教授法に対しては教授・学習対象の選択や構成に関する大まかな指針を与える。例えば長期あるいは短期の海外研修のために事前指導を計画する際に、どのような学習内容が提供されるべきかを点検することができる。また異文化適応を念頭に置いた異言語（外国語）学習のプログラムを構想する際にも同様の指針を与える。

〈図１：丸井2001より〉

- 行為外的領域
  - ハードな要因
    （景観、建築、制度、財貨、食物など）
  - ソフトな要因
    （共有されたイメージ：社会行動の類型像、味覚関連、身体感覚など）
- 行為内的領域
  - ハードな要因
    （相互行為の場面：事務所か路上かなど、場面内指示の対象）
  - ソフトな要因
    - ディジタルな要因
      （記号言語、言語表現一般、言語行為の意味論）
    - アナログな要因
      （音声、表情、身振りなど非言語表現、その共有像）

視点をやや低くして、全体として見ると一単位の社会行為が言語相互行為の継起的構成を通じて実現されるという出来事に注目する。そうすると行為外の要因は逐次的に実現される行為事象に対してはマクロなコンテクストとして理解され、行為内の諸要因はそれ自体が刻々と生成されつつあるミクロなコンテクストを構成する。この見方の利点は、例えば対面談話（face to face communication）の出来事の内部で発せられる言語・非言語表現が、どのような要因・領域への関連においてどのような意味作用を示すかを明瞭に示すことができる点にある。つまり言語相互行為の出来事内部で実現され、出現するものとしての（異）文化をより明確に把握することを可能にする（図２）。これも異文化及び異言語学習で、何が学習対象であり、習得されるべき技能であるかを明示する上で有益である。いわばスポーツにおけるイメージトレーニングと類似の機能を果たすことが出来る。

〈図２：報告書2001より〉

行　為　外（マクロコンテクスト）

ハードな要因：国家制度、機構、宗教、インフラ‥‥
ソフトな要因：共存在・社会行動の像、時間観念、味覚、身体感覚‥‥

行　為　内（ミクロコンテクスト）

ハードな要因：場面の特性、物理的構成要素
技術的媒介（電話など）

ソフトな要因：
言語相互行為の類型概念
相互行為展開のパターン
局面（展開の各段階）
言語表現/非言語表現

一単位として認定される言語相互行為の出来事

丸井（1998, 131; 2001, 29）での記述に基づいて、行為内的領域の「ソフトな」構成要因をさらに詳細に見ていこう。前理論的に「言葉」や「身振り」など言語・非言語表現は三つの主要なアスペクトの統一体として捉えることが出来る。以下略述する。（括弧内はそれぞれに理論化された場合の代表的な研究分野名。）

1）社会行動（相互行為理論、相互行為の社会言語学、社会学、民族誌記述、等）
ことばや身振りははまず社会行動として意図され理解される。
「立派な態度」「失礼な奴」「気が利く」「生意気だ」（関連の慣用的評価表現の例）
ここでは協調様式、行為類型、展開パターンの差異が問題となる。

2）生理心理過程（認知科学、心理学、大脳生理学、等）
不本意な機能不全や特別の集中時に生理心理過程の側面が意識される。
「飲み過ぎでろれつが回らない」「ヒアリングがだめ」「思いを凝らす」
（上に同じ）
異なる音声表現や身体表現の実行は異なる身体性を要請する。

3）記号体系（言語学、記号学、民族誌記述、等）
日常の意識にとって「言語」は透明である。
理解不可能な異言語の異音声との接触が言語の記号性を暗示する。

文化の差異はこれら三側面の全てにおいて（も）体験され定位される。上で例示した「うん」という記号体系の側面では目立たない表現の意味作用は、むしろ他の二つの側面で明快に理解される。言語表現ではなく身振り（うなずく等）をともなう音声パフォーマンスとしての「うん」は、心理的には共感・共鳴の表出であり、談話組織としては特定の展開パターンを実現する。

4．社会と文化はどのように捉えられるか

広義の言語相互行為の研究では、意味作用の包括的規定関連としての総体的な社会のモデルが明示されないまま暗黙のうちに何らかのイメージが前提にされることが多いように見受ける。これは例えばドイツの一都市内の異なる社会グループにおける談話事例の極めて膨大かつ詳細な調査分析からなるマンハイムドイツ語研究所の著作（Kallmeyer et al. 1994/95）にも、あるいはそれ自体は妥当で精緻な日本語の談話行為研究であるS．K．メイナードの著作（1993）にも該当する。単一社会・文化的な研究の効率の点で、こういった限定はやむを得ないし、視点の限られた有効性からも正当化できるが、文化集団間の差異が問題になるとそれでは済まない。個々の事例や部分構造に見られる表面的な類似は、発生的な来歴に規定された生態的布置における一致を保証しないからである。

言語相互行為研究のための明確な総体モデルの一つは、エーリヒとレーバイン（Ehlich/Rehbein 1986）が制度と相互行為パターンの関連を解明するために提示した。彼らのモデルの意義は、制度が社会的生産と再生産に関わる目的の細分化と機能分担に対応していることを明示したことにある。ただし社会の様々な媒介レベルにおいて人間が

相互に形成する諸関係のあり方についてのイメージが不明確である。方法的に「話し手」「聞き手」の認知機構に指向する個体主義的な残滓が顕著であり、方法論的には間主体主義が徹底していない。これに対する対案は、社会的存在としての人間達が織りなす相互依存関係という意味での「関係態（Figuration/figuration)」と「プロセス（Prozess/process)」の理論の提唱者であるN.エリアス（Elias, 1976,1991a/b/c）に従って提示できる[2]。ある社会の中で文化を共有する人々の像をエリアスの人間学によって描くには注釈的な迂回作業が必要である。それは文化の概念に関わる。以下の論述を通じて社会と文化の関係がより明らかにされると考える。

エリアスは「文化」（Kultur）という語を主著の理論用語としては用いなかった。大著「文明化の過程」の冒頭部（Elias 1976, 1-42）では、「Zivilisation」と「Kultur」概念のフランス・イギリス及びドイツにおける顕著な差異が説明され、特に前二者の「文明」観との対比でドイツにおける「Kultur」概念の特異性が強調される。フランス語を話す18世紀当時のドイツ貴族社会に見られる「皮相な Zivilisation」に対抗して、政治的には無力だった中間階層の知識人達は、芸術や学問分野での誇るべき業績（典型的には作品）という意味成分を顕在化するように「Kultur」の概念を精錬した。この概念の対置は初め同一社会内の階層間の差異に関して、その後19世紀のナショナリズムの時代には民族間の差異に関して力説されるようになる。集団内で一般的な態度や振る舞い（以下にある「Habitus」）ではなく、特別な達成という意味での文化概念（「文化人」「文化勲章」「文化都市」等々）は19世紀後半以降に日本へも移入されたようである。それとは別に、この論でもそうであるように、20世紀初めにはまず人類学などの分野でドイツ語圏を越えて「Kultur」の用語が受容されるようになっていた。とはいえ、1920年代のドイツで独自の探究を開始していたエリアスはこの歴史的な負荷の大きい用語を用いなかった。行為と過程ではなく、達成物として物象化されうる「Kultur」の含意を避けたのであろう。彼自身の概念構成と用語法においてこの論で言う文化の概念に対応するのは、「Zivilisation」の多様な要因の中で、特に「ハビトゥス（Habitus)」の概念である。このことは言語がハビトゥスの枢要な構成要因とされることからも明らかである（Elias, 1991c, 244)。ハビトゥスは一般的には、習慣、習性、気質などの意味で用いられるが、エリアスは1930年代に原稿が完成された著書「文明化の過程」の中では個人性と超自我の形成に至る心理的ハビトゥスの変遷過程を説明することを目指した（Elias 1976, LXXVIII)。下って「個人達の成す社会」の第三部では、個人性が出現する母体である一社会に共通の対人的社会的特性に関して社会的ハビトゥスの概念を用い、民族性（国民性）という前理論的通俗的な表現で意図されている問題も典型的にハビトゥスに関わるとする（Elias, 1991c, 244-245)。

エリアスは、常に一定の社会的相互依存関係の網の目の中に、常に複数で立ち現れる人間達という共主体的（間主体的）な人間像から出発する（Elias 1976, LXVII)。社会はその構成員である個々人の無動機な総和ではなく、また個々人を超越する独立の構造体でもなく、個々人のなす特定の相互依存関係とその総体としての関係網（関係態）と

して捉えられる。いかなる相互依存関係と関係態からも独立の個人はありえない。人は出来上がった個人として生まれるのではなく、特定の依存関係網の中での社会化過程を経て、当の関係態に応じて、それと認められる個人に育つ。この個人化過程は一生涯続く。彼は人間が根本的に他者を必要とし、他者との関係の内で他者とのコミュニケーションを通じて個人性を獲得すること、個人の唯一性は他者との特定の関係性を前提とすることを、歓談の対話事象などを例にしながら繰り返し述べる（Elias 1991a, 39-48; 1991b, 204)。

この見方が我々の考える文化の理解に対して持つ意味は、個々人の依存関係網総体としての社会は、そこに見られる共有されたハビトゥスが他集団に対しては示差的特徴であるという意味で、いわば文化の出現舞台であり同時に産物であること、逆に文化は超個人的な構造でなく、また他者と隔離され閉ざされた個人の内面に定位するものでもなく、特定の関係性の内で常に成りつつある人間達の相互行為の過程の中で観察され、その過程を推進する原動力であり産物でもあるという把握を可能にすることにある。エリアスの提示する社会と人間の像は、上で設定した操作的文化概念と一定の整合性をもって関連づけが可能である。

5．出来事としての言語相互行為の位置

上でも言及したが、エリアスは、個人の特性が特定の関係態の中で他者との絶え間ないやり取りを通じて形成されることを、彼が比較的単純な人間関係像であるという歓談の事例を例にして説明する（Elias 1991a, 44-45)。そこで彼は対談の一方の参加者の発言のみを取り上げてそれ自体で統一体であるかのように見なすことは、その中で人が個人となった関係性、つまり絶え間なく織りなされる他者との関係の織り目とは独立に個人が存立すると考えるに等しいと言う。さらに上記箇所に続けて(46-47)、出来上がった個人と見なされる成人ではなく、幼児にとって他者との関係が持つ意味を考えれば、人間の根本的な社会性を理解できるとして、言語行為に関わる表現を半ば比喩として使用する。これを要約するなら、常に他者に向けられている幼児の衝動や感情の発露は、その他者から応答され満たされることになると言う意味で、（反射行動ではなく：筆者補足）それ自体その幼児に特有の返答行為であり、それは「衝動の対話」であるという。この衝動の対話を通じて幼児は自己制御のより精密に区分された方式を身につけ、個人性を獲得する（つまり初めの初めから他者なしには個人なし：筆者補足)。ここで特に注意を喚起したいのは、エリアスが現代の発達科学で知られている共存在と相互性の事象に一早く言及したかもしれないということではなく、ここにはエリアス自身が十分に展開しなかったと思われる発想の萌芽があるということである。

例えば異文化間の交流事象で相互の違和が最も切実に感受され、行為の方向感覚が失われるのは、自己にとっての「当たり前」が成立しない場合である。周知の通り、我々の生活する世界、少なくともその大部分が、「普通は」もはや問い直しの必要がない自

明な事柄で成り立っている。身辺の事物の性質と機能だけでなく、他者とのやり取りが「いつものように」運ぶことが「当たり前」だと感受される。また周囲の人々が互いについてそのように思うこと自体を前提にしている。この通常性が成り立たないことが、異文化間の接触事象における違和の主要な原因の一つである。文化間で何がどの程度期待されているかが相違するわけである。つまり通常性（当たり前）とは、ある種の繰り返しに基づく予測可能性の意であり、その母体は突き詰めて考えれば、エリアスの言う意味で、諸社会関係（人間の相互依存関係）の網の目（Figuration）が存立し、我々がその中の特定の関係性の内に位置することにある。これが個々の行為にとって最も包括的、つまりマクロな規定コンテクストになる。

個々の言語相互行為事象に関して、通常性の成立（当事者達にとっての当たり前が成り立つこと）の最重要な基盤は、ある種の協調が、期待していたように成り立つことにある。協調とは、上位の規定レベルからの視野においては、上で述べたエリアスの言う意味で、特有の相互依存関係が今ここで（再び）実現されることである。個々の行為の継起的段階的実現という出来事のレベル（いわば「下」から）から見ると、協調とは、争うためであれ、むしろ正確には、ある特定の様態で争うためにこそ、現在進行中の出来事、出来上がりつつある特定の関係性を形成するある種の共同作業を維持し、いわばそこから逃げ出さないということである。ここにエリアス自身が例示を通じて示唆しているが明確に展開してはいない微細な領域での過程性を見ることが出来る。エリアスは上で見たように言語や対話の事象を例にして人間の社会行動の共主体性と相互依存性を解明しようとするが、西欧文明の歴史的生成過程という彼の壮大な構想の中に、この微細なプロセスとその微細な構成要素を組み込むことはなかった。これは欠陥の指摘や批判ではなく、むしろ視点の差異を述べているのであり、我々としては言語相互行為から見るやや「低い」視点の独自な意義を確認したい。

言語相互行為における協調とは、上で述べた「常に複数で立ち現れる人間達」の相互依存関係が極めて純粋に実現される形式である。この微細な出来事のレベルでの過程性は、最終的には社会関係態総体の過程的生成のマクロコンテクストに定位されうる。この点に我々の視点と、理想化され孤立させられた個体の認知機構や、純化された意識の体験が対象事象の地平である類の視点設定との差異も確認される。また相互行為中心でないタイプの社会言語学、つまり言葉の３つの主要側面の一つである記号体系における変異と観察可能な社会的変異を別個に捉え、それらの関連づけを追求する研究には、言葉が社会的なものとして立ち現れ、社会的なものが言葉において形成される場としての言語相互行為という固有の領域への視角が欠けていることも確認できる。さらに関係性から独立の個人（成人）が（非）言語記号を手段にして相互に意志や情報を交換するという通信技術的な相互行為像とも無縁である。

これは未だ単なる構想に過ぎないが、依存関係態総体の中に位置づけられる固有な関係性の生成の場としての言語相互行為という視点は、エリアスの「個人達の成す社会」の構想をある部分で補完出来るかもしれない。その際核心となるのは言語行為の被形式

規定性（Ehlich 1986）の認識である。これを説明するには、分節言語が可能にする微細な区分は思考や認知の内容に関わるだけではなく、行動状況の構成や行為の評価に関わることを指摘すればよい(丸井 1996)。

再び相互行為に現れる文化の差異について言えば、「上」からの視点では、ある集団で認知されている行為の類型概念（感謝か謝罪か等）が、「下」からの視点では、それら特定の類型が実現される手順が（発話か身振りか等)、それぞれ差異の原因となる。例えば「上」から見て、現代の日本語文化で観察される「ヨロシク行動」(「いやお宅の社長さんにはお世話になりっぱなしで」「いえいえ、今時なかなかおらんお人や大事にせえと申しつけられております」といった発話の連鎖を参照）や、その一側面である「規範遵守の態度提示」とでも名付けられる行為類型、及び「下」から見て、その実現手段である「自明事の言及、相互確認」や「定型的規範表現の発話」(「こちらも精一杯させてもらいますので、･･･」、「一生懸命がんばります」など）は、いずれもドイツ語や英語文化の諸領域では直接の対応がないように見える。行為類型の概念自体に対応がなければ、相互の理解は極めて困難になるだろう。

個人達の成す社会とは人間の相互依存関係網の複雑なネットワークであり、個々人も個々人の作る関係網も常に生成と変化の過程にある。言語相互行為はその一つの結節点が「今ここで」形成される微細な過程である。行為の類型は形成されるべき結節の像であり、慣れ親しんだ形成の類型と様態とが通常性の基盤を成す。類型の像と形成の方式が異なれば、いわば異種の通常性が衝突し違和を結果する。(文化集団に固有の形成方式としての協調様式については丸井1998を見よ。)

言語相互行為の形成史の視点から問うべきは、いかなる背景上にいかなる経緯で、ある社会・文化集団にはその類型や実現方式が形成され、他ではそうではなかったかを理解し説明することである。言語相互行為の実践過程としての言語史、心性史の構想が要請される所以でもある（Mattheier 1995, Hermanns 1995)。

6．文化比較の最大枠と最小枠

以上のような認識関心、課題設定、理論的諸前提を基にして文化比較の枠組みを考える。その最大枠は依存関係網（関係態）総体である。文化の比較（正確には異文化性の認定）には、かつて存在したあるいは現に存在しており他とは相対的に独立の相互依存関係網の特定が必要である。つまり時間的、空間的（地域的)、状況的な特性化が必要であり、一般的に「日本」「西洋」等とすることはあり得ない。それ自体の内で等質ではない日本列島やヨーロッパ大陸の全歴史過程、全地域における全ての想定可能な状況を考慮することは不可能である。例えば現代日本の地域概念や地域像が歴史的に遡って適用可能でないことは網野善彦著「『日本』とはなにか」に明快に述べられている。世俗化し、さらに通俗化への道を準備したクリスマス行事の来歴は「西洋」ではなく、まして「アメリカ」でもなく、「宗教改革後近世期ドイツ語圏北部新教地域の自治都市に

おける富裕層の家庭」という限定付きでなければ理解できない。日本列島にあっても「近世以前の本州北部ぼかし地帯における農耕儀礼」といった限定が必要である。むろん「それでも日本と欧州は違う」と言うことは出来るが、それは発見法の一手順としてのみ可能な問題設定である。

異文化性同定の最小枠は（言語）相互行為事象内部において参加者の間で刻一刻作り上げられる出来事の出来方それ自体である。出来事内部でのさらに微細な区分は以下のとおりである。

① その出来事は全体としてどのような社会行動の類型と了解されるか（謝罪か感謝か）
② その出来事の進行に関して共有された展開のイメージがあるか（「展開パターン」）
③ 今現在どの局面にあるか、その前後は？
④ どのような（非）言語表現が行われているか

この最後の項目に極小レベルの現象としての「ふん」など身振りと音声、居ずまいやたたずまいの意味作用が定位される。

最後に指摘すべきは最大枠を映す鏡としての最小枠である。共同達成としての相互行為を構成する表現行為とりわけ言語行為（言語表現、語彙）の特異な力は、談話の宇宙（語彙の宇宙）を共同で形成することにある。その基礎は記号化する能力、構想し夢想する能力である。しかもその能力は徹底的に共同主観的な性質である。他者との相互依存関係において自己を形成しなければ自己と語ることもなく夢想することもない。複雑化した社会で、一人であり沈思する個人の思いが、自分で選んだのではない母語を初めとして他者と共に保持する関係の複雑精緻と深く関わることもエリアスの指摘するところである（Elias 1991a, 55-56; 1991c, 203-204）。

電子化された形式を含めて言語相互行為研究の文献学的な手法は、架設された談話の宇宙を構成する意味作用を、それが出現した相互依存関係の編み目の中へと再構成し、そのことを通じて網の目自体をその精緻さにおいて理解することを目指す。文化比較、つまり異文化性の認識はそのための重要な手法である[3]。

注

1．本稿は日本比較文化学会第23回学術大会でのシンポジウム「文化の〈比較研究〉とは何か」におけるパネル発表「文化比較における極大と極小」に基づく。（2001年6月10日、福島市、福島県立医科大学）
2．エリアスの業績と生涯については奥村（2001）が詳しい。
3．現代の日本とドイツの対比に関してこの関連で重要なテーマは、例えば相互行為における論弁性の評価、共有領域と個的領域の意味と意義の差異に関わる。

文献表

網野善彦：
「日本」とは何か、日本の歴史第00巻、講談社、2000

Ehlich, Konrad:
Die Entwicklung von Kommunikationstypologie und die Formbestimmtheit des sprachlichen Handelns, in Kallmeyer, Werner (Hg.) : Kommunikationstypologie, 47-72, Dusseldorf, (= Ehlich 1986)

Ehlich, Konrad:
Kooperation und sprachliches Handeln, in Liedtke, F./Keller, R. (Hgg.): Kommunikation und Kooperation, 19-32, Tubingen, (= Ehlich 1987)

Ehlich, Konrad/Rehbein, Jochen:
Muster und Institution, Tubingen, (= Ehlich/Rehbein 1986)

Elias, Norbert:
Uber den Prozes der Zivilisation - Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen, Bd. I / II, Suhrkamp, 1976 (199015, = Elias 1976)

Elias, Norbert:
Die Gesellschaft der Individuen, Suhrkamp, 1991
I. Die Gesellschaft der Individuen, (= Elias 1991a) (1939)
II. Probleme des Selbstbewustseins und des Menschenbildes, (= Elias 1991b) (1940-50年代)
III. Wandlungen der Wir-Ich-Balance, (= Elias 1991c) (1987)

Herrmans, Fritz:
Sprachgeschichte als Mentalitatsgeschichte - Uberlegungen zu Sinn und Form und Gegenstand historischer Semantik, in: Gardt, A. et al. (Hgg.): Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen, 69-102, Tubingen, 1995.

Kallmeyer, Werner (Hg.)
Kommunikation in der Stadt, Teil1- 4 , Berlin/New York, 1994/1995

丸井一郎：
相互行為の評価概念、人文科学研究第４号（高知大学人文学部人文学科）、219-243、（＝丸井1996）

丸井一郎：
異文化間相互行為理論の基礎 － 文化とコミュニケーション －、人文科学研究第６号（高知大学人文学部人文学科）、125-147、（＝丸井1998）

丸井一郎（編）：
シンポジウム「異文化適応と言語教育」の報告、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、（＝報告集2001）

丸井一郎：
異文化適応教育の諸前提（研究プロジェクト「異文化適応教育の充実」成果第2部）、国際社会文化研究、第2巻（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科）、25-49、（＝丸井2001）

丸井一郎：
非言語表現の意味作用：異文化適応教育の構成要因として（研究プロジェクト「異文化適応教育の充実」成果第3部）、高知大学学術研究報告、第50巻、211-229、（＝丸井2001a）

丸井一郎、奥村訓代、金和蓮：
異文化性と教授方策－非言語表現を素材に－、高知大学学術研究報告、第59巻、9-29、（＝丸井他2000）

丸山圭三郎：
文化記号学の可能性〈増補完全版〉、夏目書房、1993

Mattheier, Klaus:
Sprachgeschichte des Deutschen - Desiderate und Perspektiven, in: Gardt, A. et al. (Hgg.): Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen, 1-18, Tubingen, 1995.

メイナード、泉子、K.
会話分析、くろしお出版、1993

Maynard, Kumiya Senko :
Japanese Conversation, Norwood, 1989

奥村　隆
エリアス・暴力への問い、勁草書房、2001